

フランス語初級用教科書で用いられる語彙について — 動詞の場合 — ¹⁾

西 野 清 治

0. 大学での初修外国語の授業時間が、1つの外国語をある程度ものにするためにはあまりにも少なすぎるということは言うまでもない。初級の授業は大雑把に言えば、発音（文字の読み方）、文法、語彙を扱うが、限られた時間の中では、どちらかという前の2つに重点が置かれる傾向があるようである。文法の基礎をある程度理解すれば、あとは辞書を用いてなんらかのものを読解することはできるので、とにかく最低限の文法事項の理解を最優先するのも必ずしも悪いとも言えない。しかし、文法優先の学習形態を取る場合でさえ、語彙というものをまったく無視することはできないことは明らかである。1ページの中にあまりにも多くの種類の単語が現れていれば、学習者を打ちのめすことになるし、逆に極端に少なすぎても学習者の知的好奇心を萎えさせることになる。また、学習者が検定試験等に合格することを望む場合には、語彙の習得はより直接的な問題となる²⁾。本研究では、以上のようなことから、教科書を作成する際の足がかりの1つとして³⁾、フランス語初級用に作られたいくつかの教科書の中で、語彙がどのような現れ方をしているかを調べてみた。

1. 調査対象・調査方法

- 1.1. 調査の対象として選んだのは、比較的最近出された8冊の初級用教科書である。これらはいずれもいわゆる文法読本の形をとっているものである⁴⁾。文法読本とは、学習者が読むことのできるある程度の長さを持った一連の文章（以下、「購読用文章」と呼ぶ）と文法事項の提示・解説・練習問題

等とが合わさって各課を構成しているものであるとおきたい。購読用文章は大きく分けると、2人以上の人物の間でかわされる対話形式になっているものと、対話ではなく1人の人物による語りの形式になっているものの2種類がある。教科書によって、購読用文章が全て対話形式になっているものもあれば、全て語り形式になっているものもあり、また、対話形式と語り形式の両方を混ぜているものもある。教科書を作成する際、購読用文章を対話形式にするか語り形式にするかということは重要な問題である。対話形式のものは、日常生活のささいなことを話す会話か、旅行する時に役立つ表現を習うための会話からなっていることが多い。語り形式のものは、フランスの文化、風土、社会等を描写する文章からなっていることが多いように思われる。したがって、平均的に見れば、対話形式のタイプにおける文章は比較的簡単であるという印象を受け、語り形式のものは相対的にやや難しいと感じられる傾向があるように思われる。ただし、対話形式のものでもかなり込み入った内容の会話等を含んでいる場合もある。1つの教科書の語彙の面での特徴は、このような対話形式/語り形式というような形式の違いと関係があるのだろうか。今回選んだ8冊はつぎのとおりである：

- ① 牛場由紀子 : *Départ destination romans* 「小説への旅立ち」
朝日出版社 1999 年
- ② 佐藤 公彦 : *Destination* 白水社 2000 年
- ③ 野村 二郎 : *Douze leçons à travers Paris* 「パリ一周 12 課」
白水社 1999 年
- ④ 久松健一 : *félicitations* 駿河台出版社 2000 年
- ⑤ 中村敦子 : *Le français pour le voyage* 「やさしく学ぶ旅のフランス語」第三書房 1999 年
- ⑥ 大野一道、金光仁三郎、南部全司、渡邊浩司 :
Les aventures de kôji 「コウジの冒険」
駿河台出版社 2000 年
- ⑦ 照木健、石井啓子、西陽子 : *Nouveau chemin d'accès à la langue française* 「フランス語への新しい橋」
第三書房 2000 年
- ⑧ Pierre-Gilles Delorme, 安田悦子 : *Si je t'aime...* 第三書房 2000 年

今回の調査では、全ての語彙を調べることはせず、動詞だけを扱うことにして⁵⁾、研究の内容をできるだけ単純で明確なものにしようと努めた。上にあげた教科書に見られる全ての動詞の出現回数を調べた。一つの出現として数えられたのは次のものである⁶⁾。

(1) a. 活用した形

b. 形容詞と同等の資格で直接名詞にかかるようにはなっていない過去分詞。即ち、動詞句的なものの1部であるとみなせるようなもの。例えば、受動態の中の過去分詞、複合過去を構成する過去分詞等。

c. 形容詞的になっていない現在分詞。例えば、ジェロンディフの中等のもの。

d. 不定形

例をあげてみよう：

(2) L'ancienne demeure de Jean-Henri Fabre, l'Harmas, **est** aujourd'hui un musée **présentant** sa vie et son oeuvre.

C'**est** là que le grand savant **a** **achevé** ses *Souvenirs entomologiques*. En **entrant** dans son cabinet de travail, on **aperçoit** tout de suite sa collection d'insectes. Mais elle **est** beaucoup plus discrète que nous l'**imaginions**. Fabre, **préférant** **étudier** leur comportement dans la nature, n'en **a** **conservé** qu'un minimum.

Le premier laboratoire de l'« observateur inimitable » **a** **été** le jardin de l'Harmas. Il y **a** **poursuivi** l'exploration du pays de ses amis, les insectes, qu'il **avait** **commencé** dès l'enfance. (照木健、石井啓子、西陽子：Nouveau chemin d'accès à la langue française 「フランス語への新しい橋」 第三書房 2000年 p.44)

この(2)の文章の中で、例えば être 「です、いる」という動詞は、est という形の現在形が3つ、été という形の過去分詞が1つで、計4回出現しているとみなされる。他に、avoir (a, avait) が5回、présnter(présentant)

を始めとする10種類の動詞がそれぞれ1回ずつ現れていると数えられる。

(2)のような購読用文章だけでなく、文法の説明のための例文や練習問題の文に含まれるものも数えられた。ただし、文字として表されているものに限ることとし、聞き取り練習のためにCD等に録音だけされている部分は除外されている。また、動詞の活用表が載っている場合、通常そこには1つの動詞につき6つの変化した形が書かれているが、それは1つの動詞が1回現れたものとして考えた。ある動詞が活用表として出された場合、それだけで6回の出現としてカウントされるとなると、他のものの出現回数との比較においてアンバランスが生じはしないかという恐れがあったからである⁷⁾。

- 1.2. 調査の結果は表の形で示すことができるが、スペースを考慮して、1冊についてだけ、全ての結果を表にして示し、残りのものについては、部分的にデータを示すことにしたい。表で示すものは、長さの短かった、ほぼ対話形式からなる⑤ *Le français pour le voyage* 「やさしく学ぶ旅のフランス語」である。

Le français pour le voyage 「やさしく学ぶ旅のフランス語」

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計
△ visiter 訪れる	4								1		5
◆ être である	6	34	13	7		9	7	12	26		114
○ aimer 愛する	12			1							13
○ chercher 捜す	1	2		1		2					6
○ monter 上る	1								5		6
○ fermer 閉める	2										2
◆ avoir 持つ		14	1			7	3	9	12		46
△ réserver 取っておく		1	1				1				3
◆ aller 行く			8	10		4	4		6		32
○ envoyer 送る			5								5
○ changer 変える			5				6				11
◆ vouloir 欲する			8					11	3		22
○ remplir 満たす			7								7
×□contresigner に副署する			2								2
○ préparer 準備する			1								1

[illegible]

表の一番上の行の数字は課を表している(Le français pour le voyage では、第5課と第10課が復習のための課になっているので、カウントされていない)。それぞれの単語は出てきた順番に並んでいる。表の下の方にある単語ほど教科書の後ろの方の課になって初めて現れたものであるということになる。それぞれの枠の中の数字が、ある単語がある課において何回現れたのかを示している。例えば、上の表の最初の動詞visiter「訪れる」を見ると、第1課で4回、第9課で1回の計5回現れているということがわかる。各動詞の左についているマークは、その動詞の重要度を表す。◆、○、(○)、△、×の順で、左が最も重要度が高い。このことについては、後程またふれる。

3. 調査結果とその分析

3.1. まず、今回調べた8冊の教科書それぞれについて得られた数字を次のようにまとめてみる：

- | | |
|--------------------|--------------|
| イ. 動詞の全種類数 | ニ. 重要語彙の出現回数 |
| ロ. 各々の動詞の総出現回数 | ホ. 出現回数の多い動詞 |
| ハ. 出現回数が1回しかない動詞の数 | |

これらのデータを見ると、対話形式の教科書と語り形式のものとの間で、いくつかの違いがあることが見て取れる。

3.2. まず、上のイ、ロ、ハ、の点について、8冊の教科書を対話形式と語り形式に分けて整理してみる⁸⁾：

A. 対話形式教科書

② Destination...	イ. 105 種	ロ. 916 回	ハ. <u>27 種</u>
④ félicitations...	イ. 141 種	ロ. 892 回	ハ. 65 種
⑤ Le français...	イ. 58 種	ロ. 485 回	ハ. <u>14 種</u>
⑥ Les aventures...	イ. 205 種	ロ. 976 回	ハ. 109 種
⑧ Si je t'aime...	イ. 62 種	ロ. 569 回	ハ. <u>29 種</u>

B. 語り形式教科書

① Départ...	イ. 155 種	ロ. 706 回	ハ. 80 種
⑦ Nouveau...	イ. 160 種	ロ. 796 回	ハ. 87 種

C. 対話形式・語り形式の混合教科書

③ Douze... イ. 145 種 ロ. 805 回 ハ. 73 種

まず、Aの②、⑤、⑧において、ハ（1冊の教科書全体をとおして出現回数がたった1回だけの動詞が何種類あるかを数えたもの）の値が他にくらべ極端に低い。逆にみれば、他のものにおいては、多くの種類の動詞が1冊の教科書の中でたった1回の出現回数しか持たないということになる。さらに、最終的にはこのことに関連することであるが、ロのイに対する割合（またはイのロに対する割合でもよいが）が、やはり、Aの②、⑤、⑧において1つの特徴を示している。この3冊では、ロをイで割った値が、他にくらべて明らかに高い。この値は、1つの動詞が、それが含まれるところの教科書1冊の中で平均して何回出現したのかということを表している。下にまとめたように、Aの②、⑤、⑧においては、1つの動詞が平均しておおよそ9回前後繰り返し現れているのに対し、他のものにおいては、平均して5回前後であるということになる：

A. 対話形式教科書

② Destination	$916 \div 105 = 8.7238 \dots$
④ félicitations...	$892 \div 141 = 6.3262 \dots$
⑤ Le français...	$485 \div 58 = 8.3620 \dots$
⑥ Les aventures...	$976 \div 205 = 4.7609 \dots$
⑧ Si je t'aime...	$569 \div 62 = 9.1774 \dots$

B. 語り形式教科書

① Départ...	$706 \div 155 = 4.5548 \dots$
⑦ Nouveau...	$796 \div 160 = 4.975$

C. 対話形式・語り形式の混合教科書

③ Douze...	$805 \div 145 = 5.5517 \dots$
------------	-------------------------------

このように、対話形式の②、⑤、⑧にある種の特徴が見られるが、なぜ同じ対話形式のものでありながら、④と⑥は異なる振る舞いをするのか。

特に⑥の値は語り形式の①、⑦の値と似ている。⑥の購読用文章としての対話の内容をよく見てみると、それが、②、⑤、⑧のものにとくらべると、細かい人間関係やそれぞれの国の文化などを話題としていて、かなり込み入ったものになっており、文章全体もそれに応じて長くなっていることがわかる。つまり、ある教科書が対話形式になっていても、対話の内容が込み入っていて、文章全体もある程度長い場合には、少なくとも動詞の出現形態に関しては、語り形式の①、⑦と同じ特徴を示すということが言えるかもしれない。今回はこのようなケースが⑥の1冊しかなかったので、断定することはできないが、このような傾向はありそうに思える。

- 3.3. 次に、基本単語とみなされている動詞がどのような出現形態をとっているかをニとホのデータで見てみよう。基本単語の制定は朝倉季雄(1997)に拠った⁹⁾。

① Départ destination romans 「小説への旅立ち」

ニ、◆ 12種 ○ 75種 (○) 6種 △ 36種 × 26種

ホ. 1. ◆ être 「である」 159回	6. ◆ pouvoir 「できる」 18回
2. ◆ avoir 「持つ」 86回	7. ◆ vouloir 「欲する」 16回
3. ◆ aller 「行く」 34回	7. ◆ prendre 「とる」 16回
4. ◆ faire 「する」 28回	9. ◆ voir 「見える」 14回
5. ◆ venir 「来る」 19回	10. ○ arriver 「到着する」 11回
	10. ○ aimer 「愛する」 11回

② Destination

ニ、◆ 12種 ○ 61種 (○) 6種 △ 19種 × 7種

ホ. 1. ◆ être 「である」 223回	6. ○ arriver 「到着する」 22回
2. ◆ avoir 「持つ」 118回	7. ○ partir 「出発する」 21回
3. ◆ aller 「行く」 50回	8. ○ acheter 「買う」 16回
4. ◆ venir 「来る」 26回	9. ◆ prendre 「とる」 15回
5. ○ aimer 「愛する」 25回	10. ○ écouter 「聞く」 14回
	10. ◆ faire 「する」 14回
	10. ○ trouver 「見出す」 14回

③ Douze leçons à travers Paris

ニ. ◆ 12 種 ○ 82 種 (○) 6 種 △ 28 種 × 17 種

- | | |
|--------------------------|---------------------------|
| ホ. 1. ◆ être 「である」 217 回 | 6. ○ travailler 「働く」 21 回 |
| 2. ◆ avoir 「持つ」 90 回 | 7. ◆ vouloir 「欲する」 17 回 |
| 3. ◆ aller 「行く」 62 回 | 8. ○ parler 「話す」 14 回 |
| 4. ○ aimer 「愛する」 24 回 | 9. ◆ prendre 「取る」 13 回 |
| 5. ◆ venir 「来る」 23 回 | 9. ◆ voir 「見える」 13 回 |

④ félicitations

ニ. ◆ 12 種 ○ 76 種 (○) 8 種 △ 35 種 × 10 種

- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| ホ. 1. ◆ être 「である」 193 回 | 6. ◆ venir 「来る」 24 回 |
| 2. ◆ avoir 「持つ」 119 回 | 7. ○ manger 「食べる」 21 回 |
| 3. ◆ aller 「行く」 56 回 | 8. ○ habiter 「住む」 17 回 |
| 4. ◆ faire 「する」 40 回 | 9. ○ arriver 「到着する」 16 回 |
| 5. ○ aimer 「愛する」 37 回 | 10. ◆ dire 「言う」 15 回 |

⑤ Le français pour le voyage 「やさしく学ぶ旅のフランス語」

ニ. ◆ 10 種 ○ 33 種 (○) 3 種 △ 8 種 × 4 種

- | | |
|--------------------------|-------------------------|
| ホ. 1. ◆ être 「である」 114 回 | 6. ○ choisir 「選ぶ」 16 回 |
| 2. ◆ avoir 「持つ」 46 回 | 7. ○ plaire 「気に入る」 14 回 |
| 3. ◆ aller 「行く」 32 回 | 8. ○ aimer 「愛する」 13 回 |
| 4. ◆ prendre 「とる」 28 回 | 9. ○ changer 「変える」 11 回 |
| 5. ◆ vouloir 「欲する」 22 回 | 9. ◆ venir 「来る」 11 回 |

⑥ Les aventures de kôji 「コウジの冒険」

ニ. ◆ 12 種 (◆) 1 種 ○ 100 種 (○) 12 種 △ 48 種 × 32 種

- | | |
|--------------------------|-------------------------|
| ホ. 1. ◆ être 「である」 191 回 | 5. ◆ pouvoir 「できる」 21 回 |
| 2. ◆ avoir 「持つ」 130 回 | 7. ◆ dire 「言う」 20 回 |
| 3. ◆ aller 「行く」 45 回 | 7. ◆ prendre 「とる」 20 回 |
| 4. ◆ faire 「する」 33 回 | 9. ○ aimer 「愛する」 19 回 |
| 5. ◆ vouloir 「欲する」 21 回 | 10. ◆ venir 「来る」 18 回 |

⑦ Nouveau chemin d'accès à la langue française

二. ◆ 12 種 ○ 87 種 (○) 7 種 △ 35 種 × 19 種

- ホ. 1. ◆ être 「である」 178 回 6. ◆ vouloir 「欲する」 22 回
 2. ◆ avoir 「持つ」 114 回 7. ◆ venir 「来る」 18 回
 3. ◆ aller 「行く」 44 回 8. ○ partir 「出発する」 16 回
 4. ◆ faire 「する」 29 回 9. ◆ prendre 「とる」 15 回
 5. ○ chanter 「歌う」 23 回 10. ◆ pouvoir 「できる」 14 回

⑧ Si je t'aime...

二. ◆ 11 種 ○ 28 種 (○) 5 種 △ 13 種 × 5 種

- ホ. 1. ◆ être 「である」 167 回 6. ◆ venir 「来る」 23 回
 2. ◆ avoir 「持つ」 65 回 7. ○ manger 「食べる」 17 回
 3. ◆ aller 「行く」 64 回 8. ◆ prendre 「とる」 11 回
 4. ○ aimer 「愛する」 44 回 9. ○ étudier 「勉強する」 9 回
 4. ◆ faire 「する」 44 回 9. ○ mettre 「置く」 9 回

二のデータにおいては、基本単語としての重要度の面から見て段階づけられたそれぞれの単語の種類がどれくらいの割合で含まれているかということを見ることができる。比較的重要度が高いグループ(◆、(◆)、○、(○)の単語)と重要度が低いグループ(△、×の単語)がそれぞれ全体的な種類の総数に対して占める割合をみてみよう：

A. 対話形式教科書

	(◆、(◆)、○、(○))	(△、×)
② Destination	<u>75%</u>	25%
④ félicitations...	68%	32%
⑤ Le français...	<u>79%</u>	21%
⑥ Les aventures...	61%	39%
⑧ Si je t'aime...	<u>71%</u>	29%

B. 語り形式教科書

① Départ...	60%	40%
-------------	-----	-----

⑦ Nouveau...	66%	34%
--------------	-----	-----

C. 対話形式・語り形式の混合教科書

③ Douze...	69%	31%
------------	-----	-----

これらの数字の間にはそれほど目立った差はないが、3.2. で見たのと同様に、やはり、②、⑤、⑧における割合だけが70%を越えていて、他よりもわずかながらやや高めである。

×印の単語の割合だけをみると、対話形式の教科書と語り形式のものとの差がより顕著に表れる：

A. 対話形式教科書

② Destination	<u>7%</u>
④ félicitations...	<u>7%</u>
⑤ Le français...	<u>7%</u>
⑧ Si je t'aime...	<u>8%</u>

B. 語り形式教科書

① Départ...	17%
⑦ Nouveau...	12%
⑥ Les aventures...	16%

C. 対話形式・語り形式の混合教科書

③ Douze...	12%
------------	-----

語り形式のものや、内容が比較的込み入った⑥で×印の単語の割合が比較的高いのは、さまざまな事柄を表現するためにはどうしてもいろいろな種類の単語が必要になるということであると考えられる。

ホでは、8冊の各教科書が、基本単語のうちのどの動詞を多く出現させているかが表されている。どの教科書でも、◆印の単語がある程度上位を占めている¹⁰⁾。各教科書の特徴は、○印の単語を上位10位までのうちにどのくらい含んでいるのかということに表れている。○印の単語が比較的多いのは、対話形式の②、④、⑤、⑧であり、これらは4つ以上含んでいる。◆印の動詞は、ほとんどが不規則活用動詞であるが、意味的にも構文的にも重要なものであり、さまざまなことを描写するためにどうしても必要となるものなので、語り形式のものに多く含まれているということではないか。さらに、上位10位の中に含

まれる○印の動詞は大半がer型活用動詞などの規則動詞である。規則動詞が頻繁に現われるということは、学習者がさまざまな活用形に悩まされることがそれだけ少なくなるということでもあるといえるかもしれない。初級の段階で、動詞に関しては、まず規則動詞の活用の習得を優先的に考えるという方針の下であれば、規則動詞が頻繁に現われることはよいことであろう。しかし、それとは異なる方針がある場合には、また別の評価になるだろう。

3.4. 上でわかったことをもう一度簡単にまとめておこう：

- i. 対話形式の②、⑤、⑧では、たった1回しか出てこない動詞の種類数が他に比べて少ない。
- ii. 対話形式の②、⑤、⑧では、1つの種類の動詞が1冊の中で平均して9回前後出現している。他のものでは、平均5回前後出現している。
- iii. 基本単語の中でも◆印、○印などのついた重要動詞に関しては、8冊全体を通してあまり差はないが、対話形式の②、⑤、⑧ではほんの少しそれらの重要動詞が含まれる割合が高い。
- iv. 基本単語の中で重要度が比較的低いとされた動詞が含まれる割合は、対話形式の②、④、⑤、⑧では他に比べて著しく低い。
- v. 対話形式の②、④、⑤、⑧では、出現回数でみた上位10位の動詞の中に、規則動詞が比較的多く含まれている。
- vi. ⑥は対話形式であるが、他の対話形式の教科書とは異なる振る舞いをし、むしろ語り形式のものと似通った特徴をみせている。⑥では、他の対話形式の教科書に比べ文章全体が長く、その内容も込み入っている。

4. まとめ

初修外国語としてのフランス語の初級教科書では、語彙の面で学習者に負担を掛け過ぎないようにすることは必要なことではないか。その一方で、学習者の知的好奇心にもある程度答えられることが望ましいし、単語をできるだけ多く覚えてもらいたいわけでもある。そのためには、1冊の教科書にどれくらいの種類の単語をいれればよいのか、

1つの単語がどのようなインターバルで何回出現すればよいのかというような質問に対する心理学的な答えも、より進んだ段階では有用であることは間違いない¹¹⁾。今回の調査ではとてもそのような段階までは到達していない。今回わかったことは、対話形式の教科書と語り形式の教科書との間で動詞の語彙に関していくつかの相違が見られたということである。より正確に言えば、比較的短く、単純な内容の購読用文章を含む教科書とそうではない教科書との間に相違がみられたということである。対話形式の教科書を作れば、1つの動詞が何回も繰り返し現われ、基本単語としてそれほど重要度が高くない動詞はあまり含まないなどといった特徴を持つ教科書が作りやすくなる可能性が高いのではないかということは示せた¹²⁾。しかし、もちろん、学習者一人一人がいろいろな欲求をもっているのも、そのような教科書がどんな場合でもよいとはいいきれない。また、フランスの文化や風土などを描写する語り形式のものを作った場合でも、作成者の意識的な操作により、語彙の面でシンプルなものを作ることも不可能ではないだろう。

注

- 1) 本論文は、1998,1999 年度神奈川大学言語研究センター共同研究「フランス語初級教科書の研究及び作成」として行われた研究の一部をまとめたものである。
- 2) 外国語学習の初期の段階における限られた時間の中で語彙の習得にも力を入れることは簡単なことではないように思われる。母国語としてのフランス語教育においてさえも語彙の学習は後回しにされがちのようである：

« La composante lexicale du langage fait très rarement l'objet d'un apprentissage spécifique et régulier dans les activités d'enseignement du français langue maternelle. » (Jean Pruvost 1999)
- 3) 注1であげた共同研究の一環として、フランス語初級用教科書の作成も行われた。
- 4) 注3で言われている教科書が文法読本の形をとっており、その関係で文法読本のものを選んだ。
- 5) 言葉の教育における動詞の重要性は指摘されている：

« ...Mais s'il fallait choisir, je donnerais la préférence au verbe, victime, dans les exercices qui m'ont été proposés, d'une grande disette. On peut, à la rigueur, faire de l'étiquetage en collant des noms concrets sur des images, sans faire intervenir de verbes, mais ça n'apprend pas à parler. On parle avec des phrases, et le verbe est ce qui structure la phrase. »
(Jacqueline PICOCHÉ 1999)

- 6) ある語が(1b),(1c)に該当するものかどうかの判断は難しい場合もあった。
- 7) 今回の研究では手の届かない性質の、学習者の記憶などといった心理学的な観点から考えたとき、学習者がある動詞に活用表で一度に6回出会うのと、数ページ内で何度かに分けて6回出会うのとではどちらが有効なのかということも考慮に入れることができれば、いっそうよいであろう。
- 8) 対話形式のタイプの教科書であると区分されたものでも、全ての購読用文章が対話形式になっているものは少なく、全体の12課ないし13課のうちの1課か2課分は語り形式の購読用文章になっている場合のほうが多い。
- 9) 朝倉(1997)において、色刷りでしかも◆印のついたものは、◆印をつけた。色刷りで、なにもついていないものには○印をつけた。色刷りになっていないものには△印をつけた。朝倉(1997)に載っていないものには×印をつけた。代名動詞は、もとなる動詞とは別にカウントした。(○)印のついているものは、もとなる動詞は色刷りされているが、その代名動詞自身は色刷りにはされていないものである。例えば、trouverは色刷りされているので○印がつけられているが、trouverの見出しの下にでてくるse trouverは色刷りされていないので、(○)印をつけるようにした。したがって、◆、(◆)、○、(○)、△、×の順序で、右に行くほど重要度が低くなる。朝倉においては、基本単語の重要度は、おもに各単語の頻度をもとに決められている。基本単語の重要度を決めるとき、単語の頻度がある程度の意味を持つということは受け入れられやすい考えではないだろうか：

Je suis toutefois entièrement d'accord avec la personne qui écrit que
« les stratégies d'enseignement du vocabulaire qui misent sur les connaissances des élèves sont toujours plus efficaces que celles qui ne le font pas ». C'est bien pourquoi nous préconisons de partir des mots de haute fréquence, qui ne peuvent pas être complètement ignorés.
(Jacqueline PICOCHÉ 1999)

また、頻度以外にも考慮にいれるべきものがあるという考えもある：

« Le taux de fréquence est certes important, mais ce n'est pas le seul

critère de sélection. Intervient également l'expérience didactique qui permet de sélectionner le vocabulaire en fonction des objectifs de communication, du public-cible, du critère de « learnability », c'est-à-dire de la transparence des unités lexicales ou des risques d'interférence dus à l'influence de la langue maternelle. Ensuite, il faut tenir compte de l'avis des experts, qui seul savent si telle ou telle unité lexicale constitue un concept de base du domaine en question, même s'il n'est pas utilisé fréquemment. (Jean BINON et Serge VERLINDE 1999)。

- 10) 特に、上位3位までは、8冊とも全て、1位 être「である」、2位 avoir「持つ」、3位 aller「行く」という順位になっている。このことは、興味深い事実だが、何を意味するのかは今はよくわからない。また、êtreはc'estという形で現われることが多かったり、plaireはs'il vous plaîtの形で現われることがほとんどであるというようなこともある。
- 11) 単語が習得されるためには繰り返しその単語に接することが必要であることは言うまでもないが、どのようなかたちでそれがおこなわれるかということも重要であるようだ：« Pour l'assimilation des mots, la répétition est privilégiée, non pas une répétition mécanique comme dans la MT, mais une répétition méthodique, grâce au réemploi et à l'exploitation des mots. » (Sophie ROCHE-VEIRAS 1999)
- 12) 非基本語彙がまったく悪いということではないだろう。次のような指摘もある。「教科書に基本語いを多く入れることと、教科書を基本語いだけで編集することとは、全く別問題である。基本語いだけで教材を編集すれば、基本語い表に出る語の組み合わせでできる話題しか扱えないことになる。その結果は、あまりにも平凡な、日常的話題だけを扱うこととなり、生徒の学習意欲を減退させることとなる。とくに、外国語教育では、語学的年齢と、現実の精神的、肉体的年齢との不調和をできるだけ小さく押さえようとする結果、きわめて低い文法・文型に、やや高度の語いをはめこんで、無理を承知で現実の年齢にいささかでも近い話題を扱わなければならない…そこで、外国語としての英語の教材の語いは、多数の基本語の中に少数の「話題に必要な非基本語」を含むことになる。これらの非基本語は、基本語を円滑に動かす潤滑油のような作用をするもので、教材に興味を添え、学習者に学習の動機を与えるものである。教材を批判して、「これこれの基本語が出ない先にこのような非基本語が出るのは困る」というような意見を出す人があるが、これは学習者の心理を考えない意見である。もちろん、

基本語の中にまじる非基本語は、多くてはいけない。最小限度の非基本語が、基本語を動かす潤滑油、または食欲を刺激する香辛料のような働きをするのが、教材の理想的な姿である。」(稲村松雄 1970)

参考文献

- 朝倉季雄 「朝倉フランス基本単語集」1997 白水社
- 稲村松雄編 「講座・英語教授法 第7巻 語い・連語の指導」1970 研究社
- Jean PRUVOST. « Lexique et vocabulaires :une dynamique d'apprentissage »
Etudes de linguistique appliquée 116, 1999.
- Jacqueline PICOCHÉ. « Dialogue autour de l'enseignement du vocabulaire »
Etudes de linguistique appliquée 116,1999.
- Jean BINON et Serge VERLINDE. « La contribution de la lexicographie
pédagogique à l'apprentissage et à l'enseignement d'une langue étrangère
ou seconde » Etudes de linguistique appliquée 116,1999.
- Sophie ROCHE-VEIRAS. « L'enseignement du vocabulaire dans la méthode
directe » Etudes de linguistique appliquée 116,1999.